

## 心の中の歌声

「ミーナや、おまえの歌声をきくと、本当に心がなごむわねえ。」

「レイおばさん、わたしね、歌手になりたいの。わたしの歌をきいてもらって、みんながしあわせな気分になれるといいな。」

ミーナは、幼いころ両親を亡くしてから、親せきのレイおばさんに引き取られ、二人で暮らしていました。暮らし向きは決して楽ではありませんでした。

今は、町の小さなカフェで働きながら、将来、歌手になることを夢みていたのです。

ミーナは歌うことが大好きです。

たとえ、つらいときや悲しいときでも、歌を歌うことで、自分を勇気づけてきたのです。

開店前のカフェに朝早く行き、ミーナは床みがきをしながら歌いました。

そして、閉店後は夜おそくまで、お皿やカップをふきながら歌いました。

ミーナの心の中には、歌うことしかありませんでした。

あるとき、カフェのオーナー、ジェイクさんが、

「ミーナ、きみの歌声は実にすばらしい。」

今度、お客さんの前で、歌ってみないかね。」

「ジェイクさん、本当ですか。ありがとうございます。」

一日に一回、それも三曲だけのコンサートでしたが、ミーナは心をこめて歌いました。ミーナの歌声はカフェのお客さんたちの間でもひょうばんになりました。

そのうちに、ミーナの歌をめあてに来るお客さんもあって、小さなカフェはいつも人でいっぱいになりました。ミー



ナは、みんなの前で歌うことができ、十分満足でした。

ミーナに転機がおとずれました。大きな町の歌劇場から、とつぜんミーナに出演のいらいが来たのです。今、最も人気の歌手やタレントが出演する劇場として有名です。

ジェイクさんに相談しました。

「ミーナ、やったじゃないか。本物の人気歌手になれるんだよ。まあ、

カフェのお客はさびしがるけど……。きっとみんなよろこんでくれるさ。」

と、ジェイクさんは言ってくれました。

レイおばさんに、このことを話しました。

「おまえが望むなら、お行きよ。わたしのことは心配しないで。

もしも、迷ってしまったときには、ミーナ、心の中の歌声をおききよ。」

と、レイおばさんが言ってくれました。ミーナは決心しました。

歌劇場では、ミーナが思ってもみなかった仕事がありました。

ショーの合間にやる手品のアシスタントです。

「カフェのかんばんむすめのきみなら、お客の気を引けると思って

スカウトしてみたんだ。がんばってくれたまえ。」

舞台かんとくのバラカン氏が言いました。

ミーナはとまどいましたが、これも歌手になるための一歩だと思って、

引き受けることにしました。

目立つお化しようや派手な衣装で登場し、手品で使う道具をマジシャンに手わたすだけのことでした。

しかし、ステージを重ねるごとに、ミーナもマスコットガールとして少しずつ人気が出てきました。

ミーナがステージに立つと、まぶしいライトの向こう側から拍手がおこるようになりました。



お金も前よりもっともらえるようになりました。

「やっぱり、ぼくの思った通りだったよ。ミーナ、きみは実にすばらしい。」

「ありがとうございます。」

でも、バラカン氏の言葉に、ふと、（これでいいのかしら……）と思うミーナ。

ある日、バラカン氏がミーナに言いました。

「今度の新作ミュージカルにミーナも出演してもらおう。」

「本当ですか。わたし、歌えるんですね。」

「まあね。でも、正確には、歌うまねをしてくれればいいんだ。」

客席からきみがみんなといっしょに歌っているよう見えさえすればいい。」

「歌うまねをしてお客さんをだますなんて……。わたし、

自分で歌いたいです。」

「何を言っているんだ。きみはうちのマスコットガールなんだ。」

きみがステージに立つだけで、お客は十分満足なはずさ。

よけいなことはしなくてよろしい。わかったね。」

「……………」

（わたしはここで何をしているのだろう。）

ミーナは、有名になってお金にもこまらない生活を手に入れた反面、自分が望んだ何かを失うような気がしました。

そして、今のままステージに立ち続けるのかどうか、迷ってしまいました。

『もしも、迷ってしまったときには、ミーナ、心の中の歌声をおききよ。』

（そうだ、レイおばさんがわたしに言ってくれたこと……）

レイおばさんの言葉を思い出したミーナは、そっと目を閉じて、自分の心の中の歌声に耳をかたむけました。



子どものころ、母さんが歌ってくれた子守歌。

やさしい母さんの歌声。

とってもしあわせな気分。

わたしには歌がある。

わたしには心の歌がある。

わたしは歌を歌いたい。

せいっぱい心をこめて歌いたい。

レイおばさん、ジェイクさん、

そしてカフェのみんなに、わたしの歌声をきかせたい。

みんなのしあわせそうな笑顔。

そのためだけにわたしは歌いたい。

ミーナの目からなみだがこぼれました。

次の日の朝、ミーナは荷物をまとめると、レイおばさん、

ジェイクさんのもとに向かって、大きな町の歌劇場をあとにしました。



(和井内 良樹 作)

# 心の中の歌声

(高学年 1-(2))

## (1) ねらい

自分自身と向き合って、夢や希望の実現に向け努力しようとする心情を育てる。

## (2) 資料の特質

歌手を夢見る主人公が、ある出来事をきっかけとして人々の注目を集め、歌とは関係ない世界に困惑しながらも、自分にとって一番大切なものは歌だと気づいていく内容の話である。自分の本当の心は「有名になりたい」なのか「歌を歌いたい」ことなのかで揺れる主人公の心情に十分共感させることを通して、子ども一人一人に、自分自身と向き合って、自分の夢や希望を実現することの大切さについて考えさせたい。

## (3) 展開例

- 1 自分の夢や希望について発表する。
- 2 資料「心の中の歌声」を読んで話し合う。
  - ①ミーナはどんな気持ちから歌手になりたいと決心したのか。
    - ・歌うことで人を感動させたい。
  - ②「ステージに立つだけでいい」と言われたときミーナはどんなことを思ったか。
    - ・断ったら二度とないチャンスかもしれない。
    - ・自分の歌声で人々を感動させたい。
  - ③心の中の歌声を聴いたたミーナはどんなことに気づいたか。
    - ・自分にはやっぱり歌しかない。
- 3 自分へのメッセージを書き発表し合う。
- 4 教師の話を聞く。

○「各自の夢に向かって努力する姿勢が何よりも素晴らしい。お互いの夢や希望を大切にしよう」という趣旨を呼びかける。

## (4) 指導上の留意点及び工夫

展開例3では、導入で記述した自分の夢について、「自分の夢の実現に向けて迷ったり不安になったとしたら、自分をどうやって励ますか」と呼びかけるようにする。

〔本文イラストは酒井桃華による〕